

図版解説

北魏金銅觀音菩薩立像

——太和八年銘——

松原三郎

全高二十四・二センチ、塗金は全体によく残り、欠損の見られない完好の姿をどめている。一見して北魏の太和時代の金銅像であることは明白だが、台座背面、圭線を引いた枠内に次のような銘文が記される。

「太和八年七月六日清

信士趙

奴始為

亡父母

造觀世音像壹軀」

太和八年（四八四）と言えば太和代（四七七）（四九九）としてはなお初期に属し、立像、坐像を通じて在銘金銅仏の遺品の乏しい時代だが、とくにこの像はこれまで全く発表されなかった新資料として、日本にある中国の金銅仏の貴重な一例に加えるべきであろう。大きな舟形光背を背にし、右手に未開敷の蓮華を持って直立する。側面（挿図1）から見ても像自体の厚味はそれほど十分ではないが、天衣が裸の両肩や両腕にしなやかにまといつく姿に当代造像の写実性がうかがわれ、冠帯の両端を大きく上に翹えすのも儀容を張る北魏仏の特色といえよう。台座の蓮弁のつくりは力強く、光背火焰文や台座文様の線刻の彫りも深い。この金銅像でとくにすぐれた作ゆきを示すのは光背背面の太子思惟像の浮彫である、裸の上身の肉付きはややもり上った厚味を見せ、下裳と榻座の強い線刻により一そう厳しく力のこもった製作となっている。（太子思惟像の下方に台座と同様、圭線を引き、文字を刻む予定が空白に残されているが、このような例は中国の石仏や金銅仏に散見する）

ところで、私がこの金銅觀音像を始めて実見したのはおよそ六年ほど前だが、その折、まず第一に思い起したのは本像と極めてよく似た青銅の觀音像（挿図2(a)）が一九六六年第二期の「文物」に発表されていることであった。一九六一年に河北省承德地区で発見されたのだが、太和八年像とはやや小さい二一・五センチ、台座前面より右側を経て背面に「維大代太和十三年歲在己巳七月壬寅朔東平郡□□真如羅太平見女阿行仰惟能仁慈□窮士俯□□□□□□□□□□為諸師造觀世音像貳行舍此女形生忍隨□」という銘文が記されている。太和八年銘金銅像と同じ未開敷蓮華を手にした觀音像だが、この像は太和十三年（四八九）銘、長文の銘文を記す台座のつくりが全く異なる以外、尊像の形式は勿論、光背背面浮彫の樹下の太子思惟像（挿図2(b)）もほぼ同じつくりと思われる。僅か五年の年代差として予想し得ないことではないが、数少しい太和銘の銅像遺品としては極めて興味深い資料といえよう。しかも、更に細かくは、どれだけの相違があるかが問題となるが、はからずも一九七九年一月訪中の際、私は北京の故宮博物院でこの太和十三年銘青銅觀音菩薩像を実見することが出来て、両像比較したいという年来の宿願が多少ともかなえられた次第である。

確かに両像比較して形式上はよく似ているが、一面、その作ゆきにはかなりの違いが感じられた。まず、太和十三年像では正面のみに限っても塗金の跡は見られず、火中の形跡も認められない点、原初より青銅像として造られたと思われるのは太和八年像と異なるが、「文物」に記載のとおり、出土後の伝世期間が長く手ずれの故もあってか、尊像のつくりは全体にややにぶい感じである。とくに大きな差違は光背火焰文で、太和八年像の渦巻状の細かな造形が太和十三年像では波状に整えられている。そして、太和八年像と同様、上に大きく張り出した冠帯の両端や、両肩や両腕にかかる天衣、更に下裳の線刻まで、すべて整然と平行線をなすが、しかも光背火焰帯との境界を示す条帯も太和八年像のような縄状ではない。このような太和八年像以上の太和十三年像に見る形式化こそ太和八年から十三年に至る年代の差であり、早く太和末年における新様式成立への胎動が理解されるのである。

いずれにしろ、この太和八年銘と同十三年銘の二像は北魏太和年間に未開敷蓮華を手にした金銅（或いは青銅）觀音像が盛行したことを推定させる資料となるが、光

挿図1 金銅観音菩薩立像(側面)
太和八年銘 北魏

しかも太和末年と太和前期の造像とでは如何に様相を異にするかは太和廿二年の光背背面の樹下の太子思惟像で一見して明らかである。もはや前二像のような一応、具象的と言える表現ではなく、すべてが図式化、文様化している、樹木は幹も葉も線描で表わし、同じく線描化した思惟像の天衣も左右に大きく拡げて像身の存在も無視するなど、この太和廿二年像の光背背面に見る樹下思惟像は単なる幾何学的な光背文様として扱われているに過ぎないといえよう。

中国の全銅仏で光背背面に樹下の太子思惟像を表わす作例は北魏皇興五年(四七一)銘仏立像の光背背面(挿図4)が最古だが、古拙ながらも、かなりリアルな表現である。その点、前述太和八年像、同十三年像の肉付きのよい裸の上身も皇興像と通ずる造形感覚を示すとも言えるが、一面、前二者では下裳の衣文や榻座の彫りも線状に形式化している。一方、この太和廿二年像に至ってそのような形式化、図式

背背面に樹下の太子思惟像を表わすのもその特色と見てよからう。ただ、同じ太和代の未開敷蓮華手の金銅観音像でも光背背面にそのような浮彫や線刻の見られないものもあり、例えば米国デ・ヤング美術館蔵の太和八年銘(拙著「増訂中国仏教彫刻史研究」図版三三八)、同十四年銘(同「拙著」図版四十八(a))、同十六年銘(同「拙著」図版四十八(b))の諸像で、いずれも共通して法量がやや小さいが(全高十四〜十六センチ)、三体ともに前述太和八年像や同十三年像とは光背の図様や着衣の形式も異なり、とくに冠帯の両端を上張り出す姿の見られないのは大きな相違である。或いは同じ北魏太和代の未開敷蓮華手の観音銅像でも前二者とは系譜を別にするのかも知れない。それだけに一そうここにあげた太和八年像と同十三年像との密接な関連が確かめられるが、更にこれら両像の延長上に置かれる一体が挿図3(a)の太和廿二年(四九八)銘の金銅観音像である。やはり光背背面(挿図3(b))に樹下の太子思惟像を表わすが、そのみならず、太和最末期の未開敷蓮華手の金銅観音像として像全体が太和八年、同十三年像と比較上、注目すべき造像である。

全高二十五センチ、北魏太和時代の未開敷蓮華手の金銅観音像中では最も大きい。台座背面の銘文「太和廿二年十一月二日□□人吳道興為亡父母造光世音一區願居家大小託生西方妙洛國土所求如意兄弟姊妹六人常与仏會」でもやはり光世音(観世音)と記す。正面の尊像や光背の形式は前述太和十三年像との違いが殆んど見られないが、光背火焰文の表現は同じく波状で、一そう簡略化、形式化が甚しい。台座もまた前面の文様は無く、簡略なつくりとなっている。要するに両者の類似は前述のとおり太和十三年像の様式が太和八年像のそれと一線を画す根拠ともなるが、

挿図2(a) 銅造観音菩薩立像
太和十三年銘 北魏

挿図2(b) 同 背面

化が一そう進み、完全に新様式の時代へ入ったわけである。石像、金銅像を通じて北魏造像が五世紀末、平面性、装飾性を深めたことは周知のとおりだが、このような金銅像光背浮彫や乃至は線刻にその特色が最も端的に現われたと見てよからう。

以上、未開敷蓮華を手にした金銅観音像は北魏太和時代の一面を代表する造像と言えるが、この期に先行する最古の遺例としては皇興四年(四七〇)銘の一体(「前掲拙著」図版二十三)があげられる。下って六世紀初頭では景明二年(五〇一)銘、延昌二年(五一三)銘などの諸像があるが(「前掲拙著」図版六十三及び六十四)、とくに後者では光背背面の浮彫は坐仏五体となる。更に、このような坐仏も正光期(五二〇)頃まで下ると浮彫が線刻に変化するようであり、新中国で発表された河北省徐水県出土

挿図3(b) 同 背面

挿図3(a) 金銅観音菩薩立像
太和廿二年銘 北魏

の正光三年(五二二)銘青銅観音像(「前掲拙著」挿図59)の光背背面線刻坐仏七体もその一例である。かくて、これら未開敷蓮華を手にした金銅(青銅)観音像も北魏末期、永安三年(五三〇)銘の青銅像(「前掲拙著」図版一〇二(a))では光背背面の線刻が完全に消失するが、同時に東魏北齊代では本形式の観音像自体の遺例も求め難くなる。しかもなお隋代に下って開皇十八年(五九八)銘の一例(「前掲拙著」図版二二九(c))などを知ることが出来るが、最近、「文物資料叢刊」(1)(「文物出版社」一九七七年十二月発行)一六六頁に河北省石家荘で発見された開皇八年(五八八)銘の金銅像が発表されている。左、手に未開敷蓮華を手にする以外は太和代の形式をよく残存しているが、このような舟形光背を背にした観音像が隋代では古式に属することは勿論のことである。

これを要するに、はるか下って隋代までもその形式の残存するのは、未開敷蓮華を手にしたこの種観音像が古く北魏太和時代に如何に盛行したかを立証するもので、その代表作としてここにあげる太和八年銘金銅観音像の貴重なことは十分強調してしかるべきであろう。

挿図4 金銅仏立像(背面)
皇興五年銘 北魏